

革命に果した労働群衆の役割の評価である」点を結びつけようとする矛盾相剋の反映と考えられる。今後の氏の活躍は、「大学闘争に疲労困憊して執筆意欲を失いがちであつた」といわれることによつて規定されている本書の二元論的歴史観をどのように主体的に克服されるにかかつてゐる。それはまた、氏のみならず筆者も含めた近現代史研究者全員の課題でもある。(二四二頁、昭和四十五年四月五日刊、巖南堂書店)

E・G・スミス著

パンチェン・ラマ一世自伝解説その他

山口 瑞 鳳

E・G・スミス氏は、アメリカの代表的なチベット学者である。数年前から印度に駐在して、アメリカの国会図書館が現地で大がかりにやつてゐる文献蒐集事業に加わり、チベット関係を担当しているという。彼の駐印と時を同じくして、チベット文献の複刊事業が盛になり、複製本の多くに彼の解説が掲載されるようになった。

スミス氏の解説は、破格の型のもが多く、複製本の解説としての位置にとどまらず、広く閲読利用されて然るべき性質を具えたものになつてゐる。

ここに六篇を選び、内容を紹介すると共に所感を記して、

読者の参考に供したい。

一

Panchen blo bzang chos kyi rgyal mshan (1567—1662)の自伝本に加わえたスミス氏の解説は、首尾の体裁は必ずしも整わないが、重要な主張を含むものと思われる。ただ、それらの主張とこの自伝の内容とは必ずしもそぐわないのが一般的な難点であらう。

先ず、パンチェン一世の生涯が位した時期のチベットとその周辺地域の事情を概括し、ダライ・ラマ政権、プータンのドクパ政権、カルカ蒙古におけるジュツウン・タムパ政権等の成立、清朝の興起、ネパールに於けるグルカの登場を述べる。ついで、チベットの黄紅二教の系統が蒙古の各部族を夫々の党派に捲き込んだ形でダライ・ラマ政権の成立とそれ以後の展開があつたと云う。全く同感である。が、パンチェン一世の伝記を、この間の事情を説明する重要な資料として活用すべきだという主張に接すると、尤もとは云いかねるのである。というのは、パンチェン一世の自伝は、続いてスミス氏が示している以上に蒙古との関係をくわしく教えて呉れるものではないからである。

例えば、「一六三四年におけるリクデン汗の敗北に始る八年と、(クシ汗による)シガツェの占拠」(p. 6)などと述べ、

自伝中の該当箇所までもスミス氏は注記するが、そこには別件の記述が殆んど前半を埋め、当のリックデン汗の敗北について語るところは全くない。ただ、「Sog po ga mtshur phu を襲い、hBri gun にも害をなしたのでパンチェン一世がこれをたしなめ、(他方) Hor smad pa が彼等を急襲して損害を与えたので(Sog po は)去った。その間に……」とあるのにとどまる。これをダライ・ラーマ五世の自伝(Vol. Ka 72a—b)によつて確かめて見ると、一六三三年、カルカ部族の一群がジグンの家畜を盗んだことに始る一連の事件をいうもので、この行為に仕返しをしたホル・メパが、結局、ソクポの勢力を怖れて和議を申し出た形でおさまりがついた。このことを部分的に伝えたものである。パンチェン一世の自伝は記述が簡略にすぎするため、他の資料と厳密につき合せないと、スミス氏のように記事そのものを誤解することになる。なお、ここで「一六三四年における敗北」と述べているのは、チベットの所伝(例えば dPag beam lion bzah f. 304b)に「外内秘密の護法神の力によつてリックデン汗は、青海の北 Caratata で歿した。」(「大草灘で痘死」とあるのを「Chos rgyal Gu ci'han に屈した。」と誤り解した結果に他ならない。

スミス氏は、十五・十六世紀のチベット仏教界では、活仏相統の習慣が富と權威の継承に優先権を主張し、黄帽派でも勢力を扶植するため、この相統方式を積極的に利用したこと

を述べ、パンチェン一世の自伝中にもその傾向の徴を見ることが出来るとしているが、正しい。続つて、Nag dban nam rgyal による政權樹立(一六一六年)前後のプータンとパンチェン一世との接触について触れているが、興味深い問題である。プータン王家についての注(2)も有益なものであるが、Mi pham bstan pañhi ma の系統は、Nag dban kun dgañ rgyal mshan の登位より一時的に復活したものの、一六六七年 Nag dban bstan hñdzin rab rgyas (1737—1694) が rgyal tshab となつた時、既に、ダクパ王家としては廃絶にされているものと見るべきであろう。この後に、Nag dban nam rgyal, Nag dban hñan dpal のミナム一世と bStan hñdzin rab rgyas を合せた三人の化身が順次襲位するが、Nag dban kun dgañ の化身は決して現われないからである。

スミス氏はタシルンボが gNas rin の資産を継承したことや、それに類似した事象を挙げた後、聊さか思いつきめいた把握方で、パンチェン一世の自伝に見られる各種の称号を取りあげて見せる。また、「この伝記の詳細な研究は、チベット史の重要な問題点の一つであるウ・ツァンの対立の起源と発展について明らかにするところが多いに違いない」などと極めて一般的ないうまでもないことを述べるのみで、具体的な事実の指摘を全く怠つている。ここでは、パンチェン一世と sde

srīd bSod nams rab brian との確執、gTsan sde pa Kar ma bsTan skyō との關係、更に dGaḥ ldan 座首に彼がなり得なかつた背景などの概説をしながら、問題の箇所を指示すべきであつた。ところが、そのことはさておき、伝記の文体に一言を加へた後、チベットの絵画を主とする美術史の問題に主題を振りむける。この箇所はスミス氏の関心の深いところであるため、読者は極めて有益な記述に接することが出来る。成程、パンチェン一世と絵師との關係も理解出来るし、パンチェンが弥勒像の鑄造に立ちあつた印象記も興味深い。しかし、他の重要な指摘や記述を省いてまでこの原文を引用する程のことはあつたのだろうか。まして、この著者は事柄の必要な出典も殆んどの場合に明記していないのであるから尚更ではあるまいか。殊に、パンチェン一世の生い立ちについて略記しながら “This youth, then known as Chos rgyal dpal bzang po, was recognized quite early to be the rebirth of Blo bzang don grub and given the name Chos kyi rgyal mshan.” と示すが、イタリヤ部分が、自伝のどこにあるともあかきず、といつて別の典拠も示していない。このような重要な事実關係の記述について不用意に発言するのは決して好ましいことではない。

パンチェン一世が宗派の垣根を忍む人であつたとして、偶文を引用して紹介しているが、この方は適切なことであらう。

続いて (pp. 8—10)、“伝記中の年次を西曆に替え、相当頁数を表に示しているが、読者に与える便宜は大きい。附録として、パンチェン、ダライの化身世系表に年次を副えたものを掲げ、Panchen bSod nams grags pa (Chbras spuṅs gzims khah goṅ ma) のそれも含んでいる。このうちの VI Grags pa rgyal mshan の死歿年次を一六五四年とするが、正しくは、一六六七七年である。スミス氏の引用するスム・テンポの年表、一六六五年の枠内に書いてあるのは、“[sprul sku Grags pa rgyal mshan の生れがわりと〔後に誤つ〕”

噂された康熙帝が誕生”とあるので、同年表の me lug (1667) の枠には、別にタクパ・ゲンツェン死亡の表示がある。まことに皮肉なことに、この事実を証明する記事がこのパンチェン一世の自伝中に示されている。すなわち、一六五六年三月十六日の条に続くところの、タクパ・ゲンツェンが dBen gnas sprul sku と共にタムレンボを訪れた (152a) とあるからである。この dBen gnas sprul sku が dGaḥ ldan bo gog tu han になる dBen sa sprul sku と若し同一ならば、この伝記中に示される彼についての珍らしい記録の一つになるであらう。スミス氏は、噶爾旦についても豊富な記述がパンチェン一世自伝にあるかのように示す (p. 3, n. 8) が、事實は全くこれと相違することに注意したい。

パンチェン一世と蒙古との人事交流については、伝記の最終部二十年に割合くわしい記述が含まれているに過ぎない。

二

ダライ・ラー八世の師 Tshe mchog glin pa Ye ges rgyal mtshan (1713—1792) の伝記に対する解説では、先ず、三つの版について、著者ダライ・ラー八世が一七九四年に書いたものであることを述べる。次に、伝記の全七章に含まれる年次を西暦で示し、相当時期の記述が収載される頁数を表にあらわした上で、伝記内容の要略を二頁半にわたって記述する。これにツェチョリンパの転生者表を加わえている。概していえば、そのない書き方をしたものとされよう。

ツェチョリンパの十六羅漢に対する関心と著作(羽田野伯猷氏が「十六羅漢のチベットへの流伝について」文化一九一一年の中で紹介、利用している)を紹介しているのは適切である。イエシエ・ゲンツェンが多くのタンカを制作させたこと、有名なラム・リム伝統諸師伝(東洋文庫蔵外目録2664, 371-2665)の著作があることにも触れている。

興味深いのは Chos kyi rgyal po Nor bu bzah po (東北目録 7082) の編集年次を求める議論である。スミス氏は Thubpa bkvan blo bzah chos kyi ni ma の全集 vol. Kha の解説 (p. 6, n. 2) 中に、ノルサンのテキストの冒頭に示さ

れるとおり、sDin chen gnas Tshe rin dhan hdus をその著者として認めるが、こゝではイエシエ・ゲルツェンが Gel dkar rdzoh sdod ツェリン・ワンドウに招かれ、一七七五年に Klu sdins に赴いたことを取り上げる。ノル・サンのテキストのはじめ (3b) に、編者がシエルカルにゾンドゥをしていたとき、テキストを整えたところとこれを結びつけるためであろう。テキストの成立時期を一七七五年の前後十年、一七七〇—一七八〇としている。理由の説明は不十分であるが、評者のいうとおりとすれば、この主張は承認されてよいであろう。

三

Thubpa bkvan blo bzah chos kyi ni ma (1737—1802) の全書 vol. Kha に対する解説は、十項目にわたる著作内容の説明をもつて始められる。

その第一は、有名なトゥムタ・シエル・キメロンである。先ず、ベナレス出版の活字本も含めて各種の版について述べ、部分的に訳出されたものについても触れる。スミス氏は、この著作のボン教に関する章の記述がよくないと云い、hBri guñ hñg ren ngon po (1143—1217) と spyan sha blo gros rgyal mtshan (1390—1448) の記述がいずれもよいと評価するが、例によって、その典拠を全く明らかにしな

い。その他は、シエル・キメロンの各章が三段構成になっていると説明するのにとどまる。なお、この書のデルゲ版の総葉数を 164 fols. とするのは、デルクバの章が 164a を以て終っているのを誤ったもので、全葉数は 208 fols. である。

第二は、チャンキャ・ホトクトの前生者としての bla chen dGons pa rab gsal 伝である。成立は新しいが、収録される地名等は研究に値する模様であると述べている。

第三と第四は、Pog to cha han bla ma bKra gis rgya mtsho 伝(？—1656)とやの弟子の略伝、マカニ二世 Nāg dban chos kyī rgya mtsho (1680—1736) 伝の夫々に対する説明である。後者のうちには、一七三三年の Chin wan blo bzai bstan bdzin の乱に伴って起ったアムド地方の名刹の被害事情、康熙帝の第十七子 Khen ze (胤礼) による紅帽黒帽二派に対する支持と、両法主の北京滞在中の死(1732)に寄せる著者トッケン、チュッキニャの感想が含まれていると紹介される。

第五はチュッキニャによる gshon nu Nor bzai の avadana についてその構成を解説。

第六は dGon lün Byam pa glin の目録(dkar chag)の説明。本文は縁起、歴住諸師記(gdan rabs)、資財帳、施主檀那記の四部から成ると示し、冒頭部分を要約する。四十一代にわたる歴住諸師記の要略は附録 II として pp. 16—27

に載せる。これによれば、スムバ・テンポの年表による記録を多少くわしくすることが出来る。

第七は、五寺に与えた beah yig 集への説明。

第八は四つの小目録集。

第九は Thar pa chen pohi mdo の正しい儀軌。

第十は願文と廻向文集

附録 I には、チベット史研究における歴住諸師記の重要性を説き、天折した A・I・ヴァストリコフ(1909—1934)の Tshetskaia Istoriceskaia Literatura (Moscow, 1962) を示す。目録と称するものは、dGon lün dkar chag のために、歴住諸師記を含む重要なものがあるのび、歴史地理の雑書としてヴァストリコフのように処理すべきではないという。これは尤もな意見である。ここに、ヴァストリコフの示した三つの歴住諸師記(bKra gis dkyil 1, sKu bbum Byams pa glin 2) と Deb ther rgya mtsho (東洋文庫蔵外 512—3057—514—3059) を併せて紹介し、目録のうちの重要なものとして、四大僧院二大 rgyud pa の目録(東洋文庫蔵外 385 A—2691, 385 B—2692)の他に、ダニヤンの目録とクンブム・チャムリンの目録の名を挙げる。この種の文献で重要性を問題とするなら、先ず、Sams rgyas rgya mtsho (1653—1705) とやの mChod sdon bdzam glin rgyan gcig gi dkar chag (東洋文庫蔵外 383—2687) を挙げるべきであらうが、

触れていない。

続いて、表題しか知られていない歴住諸師記文獻十一種を列記する。最後に挙げられた dGaḥ ldan khri chen rin byon gyi rnam thar は、Bihar Research Society 所蔵チベット本 B. No. 528 に『Bihar Choudhary 氏のカタログでは No. 1408 “Dgaḥ ldan khri rabs”』とある。

四

トゥケン全書に含まれる章嘉 rol pa'i rds rje 伝の解説には、スミス氏がこの書物以外から学んだことを殆んど何も加わえていない。先ず、奥付から拾録したとおりに、著者がグンルン・チャムパリンで一七九二年から九四年の間にまとめたとの旨を紹介。第二部約五十枚については、韻文体でまとめられていると加わえているのとどまる。ここに欲しかったのは、チャンキヤフトクトとトゥケンによる北京とラッサを結ぶ役割の解明でなかつたらうか。スミス氏は伝記全篇の要約をもつてこれに当てうると考えたのかも知れないが、成功していない。というのは、伝記各章の冒頭部と末尾に見える記述をまとめたものであるため、内容を調査する場合の目安として以上の役には立たず、この目的を果しかねるからである。しかも、第十三章最終部の解説のように、大変な誤訳も含まれている。スミス氏は、“Lcang-skye sent the

retired abbot of Dgon-lung, Bde-dgu Ngag-dbang dge-legs-rgya-msho, on a mission to Tibet.”とついているが、本文(198a)中には、グンルン・チャムパリン当局が、Bde dgu Ngag dhan dge legs を北京に送り、トゥケン活仏を勉強のため中央チベットに遣わしたいと、清朝の許可を求めたことあるに過ぎない。

附録Ⅰには、チャンキヤ・フトクトの活仏世系を表示し、歴史的な第一代として Ngag dhan blo bzai chos ldan を挙げている。

附録Ⅱには、伝記本文の第二章に示されたチャンキヤ・ルルベドルジュの師と弟子の名票を再録して、スミス氏が心得ている年次を加えたものである。

五

Si tu Chos kyi hbyun gnas (1700—1774) の自伝と日記に対する解説は、総説、シツの生涯と時代、作品の意義、二作の内容を西暦により検索できる一覧表、ネパール史の資料としての価値、附録として、十八世紀研究のための資料、十三点の伝記の紹介、カルマパ諸師の活仏表(年次つき)などから成っている。体裁の整った意欲的な解説である。

総説では、チベットに於ける梵語研究を概観し、十五世紀はじめには、その必要がなくなる程翻譯文獻が整ったとい

う。ついで、十八世紀のチベットにおこった梵語研究のちよつとした復活について語り、その背景としてネワール人工芸家達、ネパールに於けるカーストの桎梏を離れて、チベットの仏教界とかかわりを持ち、そこに入り込んでいつた事情を取り上げる。シツも、ネワール人との接触を通じ、彼等のもつ梵語文化を吸い上げること多くの努力を傾けた一人であると指摘する。

「生涯と時代」の項ではシツと同時代の学者との交友に触れ、ウチュムチンの有名な工布査布 mGon po skyabs が、その著 rGya nag chos hbyun を、彼とその友人であるこれも有名な Kah thog Tshe dban nor bu (1698—1755) とに評して貰うべく、手稿本で届けたという事実を紹介する (p. 6) が、記述の拠るところを全く示していない。

ツェワン・ノルプとの交友を通じて、シツがチヨナンパの教義 (gshan ston) に接し、これをド・カム一円に拡めたことも述べる。ターラ・ナータのこの教義は、ダライ・ラマ五世の弾圧を受け、シツの死後もなお百年禁教となつていたものである。シツは、一七三三年ネパールを訪れる途中、敢えてターラ・ナータの住した rTa brtan phun tshogs gñu を訪れている (p. 9, pp. 16—17) という。

続いて、デルゲの黄金時代に生をうけたシツが、カルマパ内部で占めた地位の重大さを示し、その生涯の概略を辿つて

見せる。紅帽・黒帽両法主に随行したネパール旅行、デルゲ王 bsTan pa tsho rin (1678—1738) を施主としての dPal spuñs dgon の創建、デルゲ版カンギュルの編集と目録の執筆 (一七三三年) — 但し、チンギュルは目録とず、Shu chen Tshul khri ms rin cen (1697—1774) の監修になる。——、Pho la nas との接触、一七四八年のネパール再訪と滞在、晩年における rGyal mo rñu と b'jan sa tham への旅行、一七七四年の死去などに触れている。

シツの著作についても肝要を書きとめている。有名な Sum rags の大注については、奥付に示されたとおり、mDo mkhar Tshe rin dban rgyal (1691—1763) のすずむび (一七三六年) に書いてあったものを修正して、一七四四年に完成した旨紹介している。その他、Sa mthah'i rnam dbye ya Dag yig nag sgron の校訂本のあることも教えてくれる。スミス氏がカルマパの重要な史書として紹介する Karma kam tshan bryud pahi rnam thar は、フランシス極東学院所蔵の Migot 博士蒐集本中にあり、殆んど部分は dPa'o gtsug lag hphren ba の lHo brag chos hbyun, vol Pa に拠っている。

スミス氏は、Si tu の弟子であり、この自伝と日記の監修者である Bai lo Tshe dban kun khyab の余り厳密でない編集態度に一言を加わえた後、シツのネパール滞在の記録を

ネパール史の資料として利用することをすすめている。

附録Ⅰは、大層有益な記述であり、そのⅡは、極めて便利な表である。ただ、紅帽派 bKra gis grags pa の誕生は一二〇〇年、パオー一世 Chos dban lhun grub の誕生は、ヌムパ・ケンポの年表によれば、一四五五年である。同 gTsong lag rgya msho に対しては、(1560—1630) が与えられている。gTsong lag dgañ ba の誕生は、ツェワン・ノルプの年表によると、一七一八年である。

シツの生誕年についての注17は、チベットの歴史史の資料として興味深いものである。

六

gTsañ snyon He ru ka Sans rgyas rgyal mshan (1452—1507) 伝の解説は、三つの重要な附録を含む、嘆賞すべき力作である。

解説は四部からなっている。第一は snyon pa の伝統、第二はツァン・ニェン伝の成立、第三は当該伝記の構成、第四は同伝記の文体と表記法の特徴、これらについて説明が行われる。

第一では、汚泥の中を転げまわり、狂った魂としてあるかも知れないニェンパ、いわば、天性のヨーギの宝珠であるもの、これを受け入れるチベット社会の素地を語る。つづいて、

批評と紹介 山口

ツォンカバのカードムバ改革とニェンパの出現の時期が重要なことに目をつけ、これをカーギュパにおける復古運動として評価する。元来、この派は、本来の発展を迫る限り、権威や富を相続する宗派的教団を形成する筈はなかった。しかるに、現実では全く逆の経過が追われていた。ニェンパの活動にはこれに対する反撥の意義があつたに違いなく、彼等はミラレバの活き方を倣うものであつたという。まさしくその通りであろう。

伝承によつても、タントリズムは民間の宗教運動を基盤とし、教団仏教化した密教の外側に芽生えたとされている。ところがチベットでは、これもまた教団仏教化し、具足戒を受けた僧によつて奉じられていつた。そこに問題のニェンパの運動が由つて来るところがあつたに違いない。既に知られている (Tucci; Tibetan Painted Scrolls, p. 98) ように、ミラレバの歌には、Kāñha · Saraha の doha の伝統に立ち戻り、それに生気を加わえる構えのあつたことも知られている。ただ、カーギュパが現実的に教団化していつたことを、スミス氏は次のように扱っているが、どういふものであらうか。"Often, a favourite nephew of one of these charismatic teachers would inherit the uncle's meditation hut which was at the centre of the clustered huts of the followers. If the nephew were intelligent he would have an

excellent chance of being acknowledged as his uncle's chief disciple and successor.”これは、伝記作者達の云うところを、いかにもそのまま受けとめた考え方である。この裏側にある事実は遙かに汚れたものであった。教団の筆頭施主は、教団の権益を一族の手で独占するため、万全の措置を取らなかつただろうか。初代が他の氏族出身者の場合、あらかじめ送り込んであつた一族出身者の弟子に、その地位を相続させ、その後をおもむろに叔伯父と甥の間で順次継承させていった。初代が施主家から出ている場合は、最初の手続きが省かれてただちに *khru dbon* 相続が成立した。この相続の内容はやがて父子相続にさえ置き換えられていった。パクモドゥパやツェルパの場合は第一の方式であり、ジクンパやドゥクパは第二の例に倣つた。ここに覆われぬ姿が見えないであらうか。もつと事実を凝視したいものである。

スミス氏は、ツァンニェンが教義の伝承を重んじ、転生觀念を軽んじた挿話を紹介して、ニェンパの態度の一面に光を当てている。これは興味深い。

第二のツァンニェン伝の成立については、我が国でも、小玉大円氏が「ミラレパ伝の諸研究」（仏教史学、第三卷、第二号、注39）で触れ、一五四七年と一六〇七年をとり上げたが、スミス氏は、ツァンニェン死後四十年を経た一五四七年としている。これは、ツァンニェンの生存年次をめぐつ

て、中井英基氏が提議した修正（「回顧と展望—チベット」、史学雑誌、第七十七編、第五号）の意見を強力に支持するものであることを加えておきたい。

スミス氏は、ツァンニェン伝が他に二本あることと、このツァンニェン伝の作者 *sNa tshogs ran grol* と *Ras chuñ* 伝の作があることを教えてくれる。また、*hBrug pa kun legs* (1455—1429) に関しても、貴重な注 (n.4) を施している。ちなみに、*dbus snyon Kun dgah bzain po* の生歿年は (1458—1532) である。

第三の、伝記の構成については、全体が十五章四十三項に分れ、年を追つて書かれているが、年次は殆んど示されていないと説明し、目安になる年次として、生歿年の他に、ミラレパの歌集と伝記の編集を終えた一四八八年、ネパールの *Svayambhunatha* を再興した一五〇四年があることに注意している。本文四三項の要約に頁数もそえられ、読者の便宜がはかられている。

第四の表記法の特徴と文体論では、かなりくわしい説明が行われる。その中で、一般に、*bkah gdams pa* と書くかわりに *dkar gdams pa* と書く傾向のあることをはつきり指摘している。このことは、*bkah bryud pa* とあるべきものを *dkar bryud pa* と書く傾向 (*Hlohi chos hbyun f.85* hog b 参照) があることの説明にもなつてゐるわけである。と

ところが、スミス氏はニエンバの伝統を論じた際に、くわしへ注 (n. 2) を書つて、ふわふわ bkah bgyud pa は、本来 'dkar bgyud pa と示されるべきものが、誤つて bkah bgyud pa と表わされるようになったとし、この派の ras pa が白木綿を着用したことからの称が出たという説明を、大まじめに伝えている。この見解についての反論は、改めて構えるまでもなく、スミス氏が解説を書いたトゥムタ、シェルキメロンのカードムパとカーギュバの各章冒頭部に示されている。この呼称の使用がブータン系 (ラダックも含む) 以外の古本で確認されているというなら考慮にも値しようが、今は論ずるまでもないことである。文体論中、sbyin gyi や yon shin hdug を独特の表現のように扱つてゐるが、これの Mani dkañ hbum などによつて見られる口語系の言葉遣いである。(但し、gyi は gyis の形で示されてゐる)

注 34 の訳のうち、"some gesheś of hbras spungs and Se ra" は、"they engaged" のあとに置き、続け、"in logical dispute with him" としなければ誤訳である。スミス氏が不可解とする "gab le" は "h'gab pañi le tshan" 「適合する類例」を意味する熟語であろう。評者が不可解に思つのは、"mans nas med" の訳が、"There are" となることである。

khyod kyi(s) ma thos pañi chos dan ges bya mans nas

med/cha lugs h'dra shar byun bañi gab le med na/gsan shags kyi lha nrams...kyan shar ma byun ba yin nam/

右の訳は、むしろ次のようでないのだろうか。

お前が聞いたことがない (というだけで、その) 法や知識が全くないものであり、このような遣り方は、嘗つてあつた例がない (から正しいものではない) というなら (お前が経験せず、伝聞していないことは、すべてでないか、正しくないことになるが、) 真言秘密の仏も (お前は見たことはないだろうが、) かつてあつたことがないということであるか。

"mans nas med" は、"ma nas med" の異態字と誤らず、"tsa nas med" と同義だからである。

附録 I では、ミラレバの伝記と歌集の諸版について詳細な報告をする。この中で、スミス氏は、bsTan rgyas glin 版の gsol hdebs と同じ「Nam mkhañ beam grub rgyal mshan 年一四四八年' bkra gis lhun grub chos grwa y 書いた」ことを明に述べる (p. 20)。その上、de Jong 氏が別版に同じ mGur hbum の奥書と bkra gis lhun grub chos grwa che とあることからタシルン版であると決めたことと異議を唱える。しかし、我々の見るテンゲリン版では、gsol hdebs の書かれた地はこの伝記歌集が書かれたと同じ場所の La phyi gais kyi rva ba に指定されてお

スミス氏の発言を根本から否定する。若し万一、スミス氏のテンゲリン版にのみそうあつたとしても、「ミラレバ歿後三十四年の sa pho hbrug の年」が、タシルンポの建つた翌年に当る一四四八年では絶対ありえない。つまり、この年では、当該伝記歌集の成立はもとより、編者のツァンニェンが生れていないので、この書に附する gsol hdebs も書かれるわけがないからである。sa pho hbrug は、一五〇八年か、それ以後となり bkra gis lhun grub chos grva che は、一般にそうとされているとおり、タシルンポ以外の何物でもなく、疑われる理由は全くない。

附録Ⅱは、ツァンニェン・ヘルカとその弟子達による著作、及び出版事業に関する詳細な報告である。読者は、貴重な文献表と、耳なれない事実関係の報告とに接することが出来る。殊に、skyid roñ の Brag dkar rta so に僧院を建て、出版事業に力をそつた lHa bsun Rin chen nram rgyal についての報告から多くを学ぶに違いない。

既に問題になつたことであるが、マルパ伝の著者 Khrag lhtun rgyal po を、トウッチ氏が認めている (T. P. S. p. 257, n. 171) とおり、ツァンニェン・ヘルカであるとし、伝記の成立を一五〇五年頃としてゐる (p. 23)。ツァンニェン伝の構成をのべた際にも (p. 12) この点に触れてゐるが、第十四章冒頭に「これよりあしかけ三年の間 (歿年まで) 夏

は Ho chun に、冬は Chu bar にまじまつ、……(lPhags pa gñ kun 塔再興費の) 残りのお品をもつて rje Mar pa の伝記と mGur hbum を木版になつた。」(118a) とあり、マルパ伝の奥書まで「Dur khrod ful bahi nal hbyor pa khrag lhtun rgyal po が……Chu bar pho brah び書とめさせた……」とあるから、異同の確認に疎漏はないと思われる。

附録Ⅲは、ドクパの正系とみなされる Bar hbrug pa 歴代の伝記集と、sTod hbrug pa のそれらについての解題である。いずれも手にとりたゞ資料であることはいふまでもない。

スミス氏の解説は、然るべき体裁を欠いたもの、例えば (4) のようなものもあるが、それ自体は、利用価値の高い記述に充ちている。殊に、スミス氏自身が興味をもつて処理している (a) (6) のそれなどは、容易に真似られない内容を具えている。評者は専ら瑣末な事実を取り上げたため、読者の印象を損ねたかも知れないが、スミス氏の貢献に深い敬意を示したいと思う。

(1) Introduction to the autobiography of the first Panchen Lama Blo-bzang-chos-kyi-rgyal mshan, Gedan

sungrab minyam gyumphel series vol. 12, New-Delhi, 1969.

(2) Introduction to the biography of Tshé-glin yongs-'dzin Ye-shes-rgyal mshan, Gedan sungrab minyam gyumphel series, vol. 11, New-Delhi, 1969.

(3) Introduction to the collected works of Thupubkwan Blo-bzang-chos-kyi-ni-ma, vol. 11. (Kha), vol. 1 (Ka), Gedan sungrab minyam gyumphel series vol. 2, vol. 1, New-Delhi, 1969.

(4) Introduction to the autobiography and diaries of Si-tu pan-chen, Satapiaka series, vol. 77. New-Delhi, 1968.

(5) Preface to the Life of the saint of gTsan, Satapiaka series, vol. 79, New-Delhi, 1969.

サルトノ・カルトディルジヨ 著

一八八八年バンタムにおける農民反乱

森 弘 之

ガジャマダ大学（インドネシア、ジョクジャカルタ）文学部教授サルトノ・カルトディルジヨ氏による一八八八年西部ジャワのバンタムで起った農民反乱に関する大著である。

批評と紹介 森

オランダ植民地支配の下ではじめて「インドネシア史」の叙述が試みられたが、それは「蘭領東インド史」という名が示すようにインドネシア社会の歴史を扱うものではなく支配者としてのオランダ人を中心とする西欧人の側からみたそれであり、そこではオランダ史の一部ないしは延長と考えられていた。インドネシア民衆ことに農民が植民地主義歴史家から与えられる役割はまったく受け身のものであったが、第二次世界大戦を経てやつとこのような植民地中心の見方への批判がファン・レール、スフリーケ、レンシク、スマイル、ウェルトヘイムなど西欧の歴史家やインドネシア人歴史家によつてもたらされたといえる。

農民の担った歴史に照明をあてることを重視するべきであつてそのことが「近代」——modern times——というこの著者の使う言葉は、なお正確な概念規定を要すべきであろうが——へ連なる歴史の流れを辿らさせることになる。農民およびその蜂起についての研究がほとんどなされなかつたことが反省されなければならないというのが、著者の基本的姿勢である。

このようにインドネシアの歴史を民衆ことに農民を中心にみようとするともに、著者はインドネシア史を「構造的側面」を注目しつつ考察すべきであり、その「構造的」アプローチによつてこそオランダ中心史観のもつ偏見が明らかにな